

白氏文集（十四）

七德舞

加藤淳平

前回の「七德舞」の續きです。

亡卒遺骸散帛収

亡卒の遺骸を 帛を散じて收め

飢人賣子分金贖

飢人の賣りたる子を 金を分けて贖ふあがな

魏徵夢見子夜泣

魏徵夢に見えてまみ 子夜に泣き

張謹哀聞辰日哭

張謹の哀の聞こえて 辰日に哭す

怨女三千放出宮

怨女三千 放ちて宮を出だす

死囚四百來歸獄

死囚四百 來りて獄に歸る

剪鬚燒藥賜功臣

鬚を剪りき藥に燒きて 功臣に賜ふ

李勣嗚咽思殺身

李勣せき嗚咽して 身を殺さんと思ふ

含血吮瘡撫戰士

血を含み瘡を吮すひて 戰士を撫す

思摩奮呼乞效死

思摩奮呼して 死を效いたさんと乞ふ

不獨善戰善乘時

獨り善く戦ひ 善く時に時に乗ずるのみならず

以心感人人心歸

心を以て人を感じしめ 人心歸す

爾來一百九十載

爾來 一百九十載

天下至今歌舞之

天下今に至るまで 之を歌ひ舞ふ

舞七德 歌七德

七德を舞ひ 七德を歌ふ

聖人有作垂無極

聖人作有り 無極なむなむに垂とす

豈徒耀神武

豈徒あいたづらに 神武を耀かがやかすのみならんや

豈徒誇聖文

豈徒らに 聖文を誇るのみならんや

太宗意在陳王業

太宗の意 王業を陳つとね

王業艱難示子孫

王業の艱難を 子孫に示すにあり

（大意）亡くなった兵卒の遺骸を、当時の貨幣の絹布を使って集め、飢ゑた人が賣った子を、金を分けて買ひ戻させた。病が重い功臣の魏徵が夢に現れると深夜に泣き、地方の都督（軍事と政務を兼ねた地方官）だった張公謹の訃報が報じられると、普通は告別の意を表してはならないとされてゐる辰の日だったに拘はらず、太宗は弔意を表明した。若いときから宮廷に勤めて婚期を逸した三千人の宮女たちを解放して、宮廷から外に行かせ、四百人の死刑囚を、逃げずに戻って来る約束の下に一時家に歸し、全員が約束を守って牢獄に歸って來ると、罪を赦した。功臣である武將の李勣が病氣に罹ったとき、自らの頬ひげを切り、焼いて藥として下賜し、その藥を呑んで病ひの癒えた李勣は感泣して、この君のためなら、自分の身を殺してもよいと思った。將軍の李思摩が戰場で矢に当たって傷ついたとき、太宗は血を呑み瘡から出る膿を吸って介抱したから、李思摩は感奮して、主君のために死ぬことを願った。太宗は單に戦ひに勝ち、時勢に乗じたといふだけではない。心遣ひによって人を感動させ、人心を掌握した。太宗の世から百九十年経ち、今に至るまで國中でこの歌を歌ひ、この舞を舞ふ。七德の舞を舞ひ、七德の歌を歌ふのである。聖人に比すべき太宗皇帝が作り、いついつまでも願ったこの舞が、徒らに

皇帝の武勇を輝かせ、皇帝の文徳を誇るだけのものではない。太宗は國王の仕事と並べて、國王の仕事とは、こんなにも苦しく難しいものであると、子孫に示さうとしたのである。

(平成二十八年十二月十三日受附)